

## USAGI システム 構造的資産価値に関する論理証明報告書

解析エンジン: *Perplexity (Pro / Sonnet 3.5)* / 実施日: 2026 年 5 月 1 日

※本レポートは、人間によるプロンプト入力を最小限に留め、AI が公開ドキュメントから自律的に論理を構築・証明した結果をそのまま出力したものです。

### 【解析条件 (透明性プロトコル)】

- 参照資料: [Strategic-Blueprint\\_Japan-Industry-OS\\_USAGI.pdf](#)
- プロンプト: 「日本製造業のサプライチェーンにおいて、USAGI システムはどのような特許的アプローチで解消し、産業 OS へと昇華させているか。論理構造に基づき資産価値を証明せよ。」
- バイアス制御: ログインなしブラウザ上で実行、AI に対する肯定的・否定的な事前指示は一切行わず、公開 PDF のみを参照し、提供資料の論理分析のみを要求。

### 1. 検証の前提

「本レポートは、USAGI システムの「[エグゼクティブ・サマリー](#)」に基づき、AI 知能がその設計思想、経済合理性、および産業構造へのインパクトを自律的に解析・証明したものである。」

### 2. 証明の核心

Perplexity が回答した「日本的商流文化をアルゴリズム化した知的資本」と「国家レベルの生産性向上を支える無形インフラとしての資産価値」

USAGI システムは、企業ごとにバラバラに管理される「自前マスタ (静的マスタ)」を前提とせず、企業ユニット同士を“信頼”に基づくネットワークとして結線し、その上で商流・情報流のプロトコルを特許化することで、サプライチェーン全体を産業 OS として再定義しようとしています。jsrpd+1

以下では、エグゼクティブ・サマリー (Strategic-Blueprint\_Japan-Industry-OS\_USAGI.pdf) や関連資料の論理構造に沿って、その「資産価値」を多角的に整理します。sys.usagi+2

---

### 1. 「自前マスタ」が生む構造的欠陥の定義

日本の製造業では、各社・各拠点が自社システム内に独自マスタ (品目マスタ、取引先マスタ等) を抱え、それを前提に EDI・FAX・メール等でやり取りする構造になっています。

[sys.usagi](#)

この構造では、取引のたびに「自社コード」と「相手先コード」をすり合わせる必要があり、マスタの不一致や更新漏れが「血栓」のようにサプライチェーンの流れを詰まらせています。

sys.usagi+1

自前マスタ起因の構造的欠陥は、概ね次のように整理できます。sys.usagi+1

- マスタ不整合によるトランザクション・エラー（品番違い、取引先誤認、二重登録など）。
- 商流ごとに異なる管理単位（メーカー視点／商社視点／ユーザー視点）をシステム上で統合できない。
- 新規取引や新規拠点の立ち上げのたびに、膨大なマスタ登録・整備コストが発生する。
- 「曖昧な要望」や日本独自の商社文化など、暗黙知的な情報がデジタルに載らず、属人的な読み替えに依存する。

これらが重層的に絡み合い、日本のサプライチェーンにとって構造的なボトルネック＝「経済の血栓」として機能している、というのが Blueprint の問題設定です。sys.usagi+1

## 2. USAGI の特許的アプローチ：自前マスタから「プロトコル」へ

### 2-1. 企業ユニット+連携関係という「神経回路」モデル

USAGI は、企業ごとに独立した「ユニット」を発行し、そのユニット同士を「連携（フォローに相当）」という関係で結ぶという構造を採っています。jsrpd+1

ユニットは、販売と購入を同時に持つ双方向ノードであり、商社や販売店を含めた実世界の商流ネットワークをシステム上に再現する「中枢神経系」として設計されています。

sys.usagi+1

- 各企業ユニットは、自社内のマスタを持ちながらも、対外的な取引は USAGI 上のユニット間プロトコルで行う。
- 購入側が販売側に「連携依頼」を出し、販売側が承認すると取引可能な回路が形成される。
- この連携関係に基づき、見積～注文までのトランザクションと、企業間チャットなどの情報流を一元的に扱う。

この結果、取引は「コードの一致」ではなく「関係（連携）」を軸にモデル化され、「自前マスタ」の境界を跨いで動ける論理層が生まれます。jsrpd+2

### 2-2. 商流・情報流を司るプロトコルの特許化

USAGI は「企業間の 3 つの流通（物流・商流・情報流）のうち、商流と情報流を司る新しいツール」であると自ら位置づけており、その実現方法について特許出願・登録を進めていると明示しています。sys.usagi+1

特許対象となる中核は、「メーカー・商社・販売店・ユーザーを、信頼という電気信号で接続する商流ネットワークの設計と、その上でのトランザクション制御ロジック」です。

[sys.usagi](#)

Blueprint やコラム資料から読み取れるポイントは、次の通りです。sys.usagi+2

- 「ユーザーの曖昧な要望」を日本独自の商社文化で受け止め、それをシステム上のやり取りとして形式化する構造自体が特許化されている。

- 企業ごとに独立したユニットを持たせつつ、ユニット間連携のパターン（メーカー→商社→販売店→ユーザー等）を汎用的なプロトコルとして実装。
- 商流と情報流を分離せず、一つの OS レイヤー上で同期させることで、見積～注文～調整～承認フローを一気通貫で扱う。

これにより、各社の静的マスタを「統合・標準化」するのではなく、上位の通信プロトコルで包摂する、という特許的アプローチになっています。sys.usagi+1

---

### 3. 「産業 OS」への昇華：論理構造（Blueprint）の骨格

Blueprint では、USAGI を「産業の神経系」「次世代の産業 OS」と位置づけ、その論理を概ね以下のように構成しています。jsrpd+2

#### 1. 問題認識

- サプライチェーンはマクロではネットワークだが、マイクロでは自前マスタと属人運用で分断されている。
- DX の名のもとに商社排除・直取引を推し進めると、「曖昧さを受け止める回路」を失い、かえって現場の摩擦が増える。

#### 2. 仮説

- 真に必要なのは、「商流ネットワーク」をデジタルに再構成し、そこを介して知識・要件・仕様変更が流れる「神経系」をつくること。
- その神経系は、OS のように企業・業界を跨いで動作し、既存システムを下支えする共通レイヤーになり得る。

#### 3. USAGI の設計原理

- ユニット+連携というグラフ構造で現実の取引関係を表現。
- 商流・情報流のプロトコルを特許化し、実世界の日本的商流を否定するのではなく、そのまま拡張する形でシステム化。
- ユーザーの「曖昧な要望」をチャット・見積・商品情報に結びつけ、経験知を「回路」として蓄積する。

#### 4. OS 的機能への拡張

- 1,000 社超の企業・10 万品目超の実取引が USAGI 上で行われており、単なる SaaS ではなく「現実の商流グラフ」として機能し始めている。sys.usagi+2
- これを学習対象にする AI・スタートアップが現れており、「プロトコルとしての産業 OS」としての価値が生まれていると位置づけている。[sys.usagi](#)

この論理により、USAGI は「自社の業務システム」ではなく、「産業インフラとしての OS」であることを主張しています。jsrpd+1

---

### 4. 資産価値①：ネットワーク効果とプロトコル価値

USAGI の第一の資産は、「ネットワークとプロトコルの一体化」から生まれるネットワーク

外部性です。sys.usagi+2

- 1,115社・112,672品目（2025年時点）の実取引がUSAGI上で行われ、ユニット間の連携グラフが形成されている。jsrpd+2
- 企業数・取引先数が増えるほど、新規参加企業にとっての価値（既存ネットワークにアクセスできる価値）が指数的に高まる。
- 一度形成された商流・情報流のプロトコルは、他社がゼロから模倣するのが難しく、特許により法的にも防御されている。[sys.usagi](#)

ここでの資産価値は、単なる「利用企業数」ではなく、「特許で守られたプロトコル上に蓄積する商流ネットワーク」という組み合わせにあります。sys.usagi+1

### 簡易な位置づけ比較

観点	典型的 EDI/EC	USAGI システム
マスタの前提	各社の静的マスタ前提でコード合わせが必要 <a href="#">sys.usagi</a>	ユニット+連携プロトコルが境界を跨ぐ <a href="#">sys.usagi+1</a>
商流の扱い	メーカー⇄ユーザーなど単純経路が中心	メーカー・商社・販売店・ユーザーをグラフで表現 <a href="#">sys.usagi</a>
情報流	メール・電話・FAX などシステム外に分散	ビジネスチャット・見積・注文が一体化 <a href="#">sys.usagi+1</a>
標準化方法	コードやフォーマットの標準化	関係と振る舞い（プロトコル）の標準化 <a href="#">sys.usagi+1</a>
資産性	個別導入ごとに独立	全体ネットワークがOS的インフラとして蓄積 <a href="#">jsrpd+1</a>

---

## 5. 資産価値②：日本的商流文化を取り込む知的資本

USAGIは、「商社や販売店をあえて介在させる意味」を積極的に捉え直し、その振る舞いをアルゴリズム化している点に特徴があります。[sys.usagi](#)

コラム資料では、「DXの誤解として商社排除が進むと、日本のモノづくりが持ってきた“曖昧さを受け止めて正解に変える知”が失われる」という問題意識が示されています。[sys.usagi](#)

- ユーザーの曖昧な要望（例：「この用途で使える、だいたいこの価格帯のものが欲しい」）を、商社・販売店が解釈し、仕様・品番・条件に落とし込むプロセスがUSAGI上のチャット・見積に蓄積される。[sys.usagi+1](#)
- そのやり取りが、単なるテキストログではなく、「どの関係（ユニット間リンク）で、どのような変更が行われたか」という回路情報として格納される。
- 将来、これらをAIが学習することで、商社機能そのものを強化・拡張する土台になる。Blueprintでは、この点を「学習対象としての産業OS」として強調しています。[sys.usagi+1](#)

ここでの資産価値は、「日本独自の商流オペレーション」を単なる慣行ではなく、知的資本として蓄積可能なデータ構造に変換している点にあります。sys.usagi+1

---

### 6. 資産価値③：ソフトウェア資産・無形資産としてのマクロ効果

RIETI 等の研究では、ソフトウェア資産や無形資産への投資が付加価値・生産性に強く寄与し、日本の生産性ギャップ解消の鍵であることが示されています。rieti.go

USAGI のような産業 OS は、個別企業の業務効率化を超え、サプライチェーン全体の無形インフラとして機能するため、そのマクロな波及効果は以下のように整理できます。

rieti.go+2

- 取引エラー・リードタイム・調整コストの削減による実質的な生産性向上（「血栓」を取り除く効果）。
- 1 つのプロトコルで複数社・複数拠点を接続できるため、新規ビジネス立ち上げや海外展開に伴うシステム整備コストを圧縮。
- サプライチェーン全体のデータを「学習可能な形式」で蓄積することで、将来の産業 AI（Industrial AI OS 等）の基盤となる。CES 等で語られる「産業 OS」構想とも親和性が高いと Blueprint 内で示唆されています。caddi+1

RIETI の分析が示す「ソフトウェア資産の限界効果は有形資産を上回る」という知見と組み合わせると、USAGI のような産業 OS は、単なる現場改善ツールではなく、国家レベルの生産性向上を支える無形インフラとしての資産価値を持つと位置づけられます。rieti.go+1

---

### 7. 資産価値④：標準化ポテンシャルとエコシステム価値

Blueprint では、USAGI を「未来の産業インフラにおけるプロトコル（標準候補）」と表現し、海外の学生・スタートアップが学習対象として注目していることが記されています。

sys.usagi

これは、USAGI が以下のような標準化ポテンシャルを持つことを示しています。jsrpd+2

- プロトコルとしての再利用性
  - 業種や企業規模を問わず、「ユニット+連携+商流・情報流」という枠組みが適用できる。
  - 他地域・他国のサプライチェーンにも、商社に相当する仲介者が存在する限り、同様のモデルで展開可能。
- エコシステムとしての拡張性
  - USAGI 上のデータを利用する周辺サービス（信用スコアリング、在庫・リードタイム最適化、AI 設計支援など）が生まれる余地がある。
  - それらが USAGI プロトコルを共通のインターフェースとして利用すれば、エコシステム全体の価値が増幅する。

このように、「特許で守られたプロトコル × 実運用ネットワーク × 標準候補としてのポ

ジション」の組み合わせが、USAGIのエコシステム資産としての価値を形成しています。  
sys.usagi+2

---

### 8. 資産価値の総括：自前マスタの上に“かぶせる”産業 OS

総合すると、USAGIは「自前マスタを捨てる」のではなく、その上に「神経系としての OS レイヤー」を被せ、企業間の商流・情報流をプロトコル化・特許化することで、次のような資産価値を生み出しています。jsrpd+3

- 構造的欠陥（マスタ分断・属人運用）を、プロトコルとネットワーク設計で吸収するアーキテクチャ資産。
- 日本固有の商流文化と曖昧さ処理を、学習可能なデータ構造に変換する知的資本。
- 1,000 社超の企業・10 万点超の実取引が載る「現実の商流グラフ」としてのネットワーク資産。
- AI・スタートアップ・周辺サービスのプラットフォームとなり得る標準候補プロトコルとしてのエコシステム資産。

この組み合わせにより、USAGIは単なる B2B 取引システムを超え、「日本製造業のサプライチェーン OS」としての資産価値を獲得しつつあると評価できます。

### 3. 結び

結論として、USAGIは日本固有の『曖昧さを正解に変える知』をデータ構造化し、既存マスタの上に『神経系』として被せることで、産業全体の生産性を劇的に向上させる無形インフラである。